

I. 水田・里山・耕作放棄地等での放牧利用の効果

1. 近畿管内で放牧が増加中

肉用牛の放牧面積および頭数は年々増加しており、平成20年度（見込み）の放牧面積は526.9ha、放牧頭数は1,597頭で、平成10年度と比較すると、面積は1.8倍、頭数は2.2倍に増加しています（図1）。

これは、耕作放棄地や水田への放牧が広がっているためです。

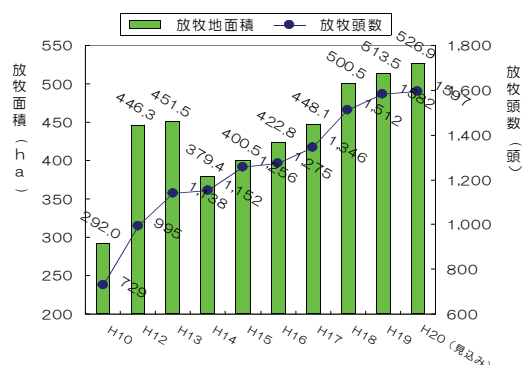


図1. 近畿の放牧面積と頭数の推移（各府県畜産主務課調べ）

2. 増加する耕作放棄地とその悪影響

全国の耕作放棄地面積は、過去20年間で約3倍の38万6千haに増加し、耕作放棄地率は9.7%です。近畿においても、耕作放棄地面積は約3.3倍の1万9千ha、耕作放棄地率は9.4%となっています（図2）。

中山間地域では、住民の高齢化と過疎の進行に伴って耕作放棄され、サル、イノシシ、シカによる農作物被害は、平成19年度で2,958haにのぼり、被害金額では13億3千万円にもなっています。獣害の多発によって、集落住民は生産意欲を削がれ、地域の活力低下を招く悪循環に陥っています（図3）。

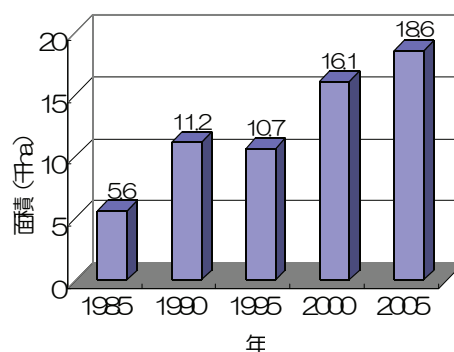


図2. 近畿の耕作放棄地面積の増加（農林業センサス）



図3. 耕作放棄地の増加がもたらす悪循環

3. 放牧は3いらず

放牧は、この悪循環を断ち切るための、手間がいない、経費がいない、難しい技術がいない「3いらず」の方法です。

このことが実際に取り組んだ多くの地域で実証され、しかも予想を上回る多面的な効果を上げていることが放牧の増加となって現れています。

4. 放牧のメリット・多面的効果

草ぼうぼうの広大な土地を人の力で草刈りをして維持するのは容易ではありません。でも、そこに牛を放牧すれば、牛が勝手に歩き回って草を食べ、人に代わってきれいに草刈りをしてくれます。単にそれだけのことが多くの波及効果をもたらします（図4）。

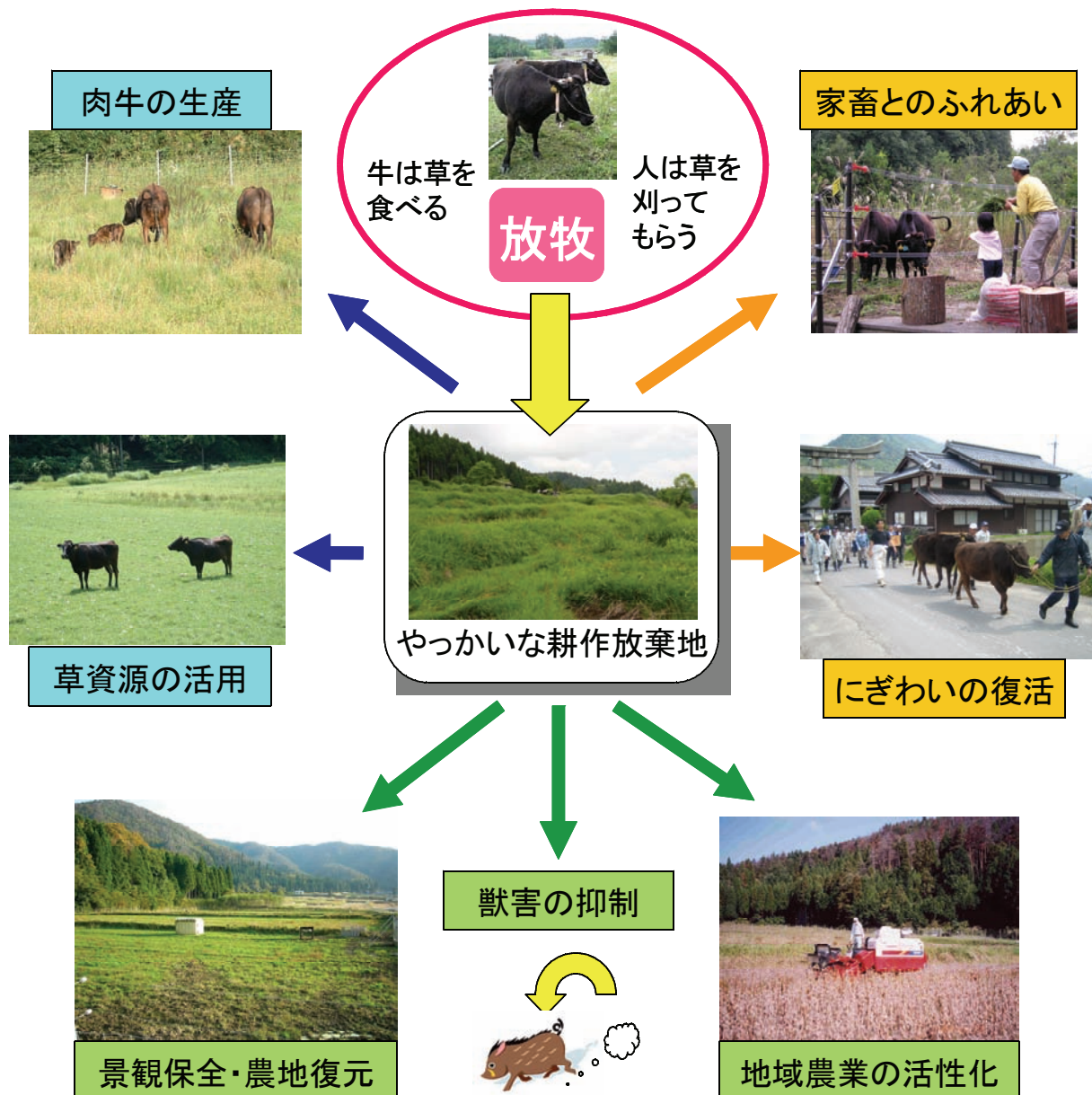


図4. 牛の舌草刈りが地域を蘇らせる

効果1：景観の保全と農地の復元

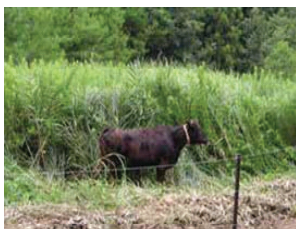
人の背丈以上に雑草が繁茂した農地が姿を現し、美しい田園風景が蘇ります。牛がのんびりと草をはむのどかな風景はどこか懐かしく、人の心に安らぎをもたらします（写真1、2）。



入牧時



写真1. 放牧によって美しい景観が蘇る（滋賀県）



高さ2mを越える雑草
の中に牛を放牧



写真2. 放牧前後の耕作放棄田の変化（滋賀県）

効果2：獣害の抑制

滋賀県木之本町の小山地区では、滋賀県農業技術振興センター湖北分場と集落が中心となり、集落と山との間の耕作放棄田に人と野生獣の境界となる緩衝地帯を設置して、獣害を回避する「放牧ゾーニングによる獣害回避試験」が取り组まれました（図5）。

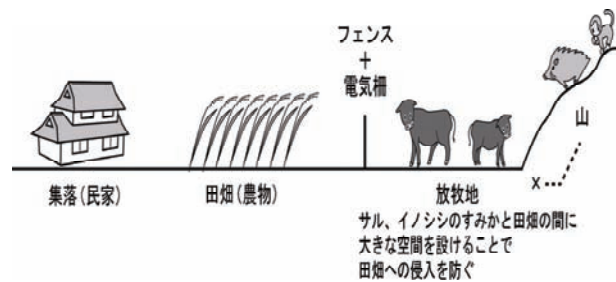


図5. 放牧ゾーニング

その結果、イノシシの侵入経路が放牧地を避けるようになり、獣害によって耕作放棄や不耕作となっていた農地で耕作が復活しました（図6）。

これは、イノシシやシカ、サルが牛を恐れるわけではなく、牛が耕作放棄地の雑草をきれいに食べてしまうことによって

見通しがよくなり、警戒心の強い野生獣がそこを通りにくくなるためです。また、餌としていた野草が減少し、野生獣にとって魅力のない場所になってしまいます。特にイノシシはクズの根を冬の重要な餌としていますが、クズは牛にとっても好物なので、放牧すると速やかに消えてしまいます。

さらに、人が寄りつかなくなっていた場所に、人が牛の管理や見物に頻繁に訪れるようになることも、結果として野生獣を牽制し、侵入を抑制する効果となって現れます。

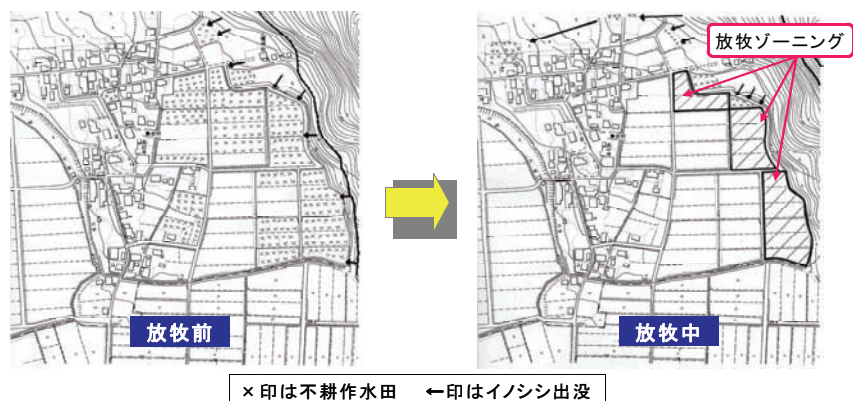


図6. 放牧前後のイノシシ出没状況の変化

効果3：地域農業の活性化

荒れた農地が蘇り、獣害が減少することによって、農業者が生産意欲を取り戻し、農作物の作付けが再開された事例も見られます。

写真3は、放牧を機に地域の農村文化の継承を目指して、牛耕に挑戦している滋賀県高島市むくかわ棕川集落のユニークな取り組みです。

また、田舎暮らしを志向する定年帰農者が、投資と労力が少なく済む繁殖牛の放牧を始めて新たに就農したり、集落が繁殖牛を購入し、

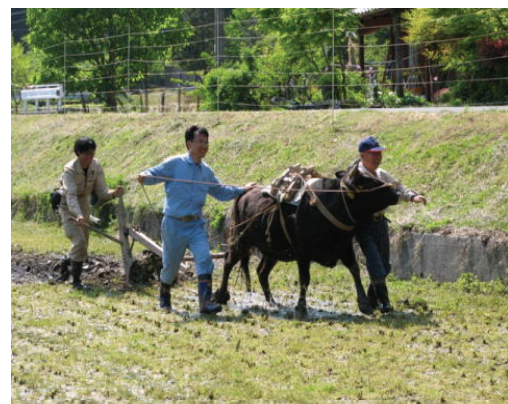


写真3. みんなで牛耕に挑戦（滋賀県）
（是永 宙氏作成「棕川の里」より転載、
<http://mukugawa.korekore.org/index.html>）

人の手に負えない農地を放牧によって維持管理し、和牛繁殖を営農に取り入れて、地域農業の再生に取り組む集落営農が近畿地域内外で生まれつつあります。

効果4：中山間地域の活性化

①家畜とのふれあい

牛を目当てに子供たちや地域の人たちが集まり、地域の憩いの場が生まれます。子供たちはすぐに牛と仲良くなり、大きな体に触れて温もりを感じ、差し出した餌を牛が食べてくれるというやりとりが他者への優しい心を育みます（写真4）。

自治会やPTAが、地元の伝統行事を活かした牛の歓迎会や様々な行事を行い、社会・情操・環境教育に役立てています。



写真4. 子供たちと放牧牛（滋賀県）

②人のにぎわいの復活

放牧をきっかけに集落の内外の人たちが集い、活気が生まれている例があります。

兵庫県では、多くの棚田を抱える集落の耕作放棄地に畜産農家が無償で牛をレンタルしています。放牧地の整備は、棚田の保全を目指す“棚田交流人”（ボランティア組織）が行い、都市と農村の交流が図られています。放牧された牛たちがボランティアの草刈りを代行します（写真5）。



写真5. 集落外から出前放牧（兵庫県）

効果5：畜産と食料自給率への貢献

①草資源の活用

耕作放棄地の草資源を活用し、水田などの里地里山の農地を積極的に放牧利用することによって、飼料自給率の高い牛肉を生産することができます。

②畜産農家の経営改善と肉用牛の増頭

穀物価格の高騰する厳しい畜産情勢にあって、放牧は飼料費を節約でき、飼料給与や糞尿処理等の家畜管理にかかる労力も軽減することができ、畜産農家の経営改善に貢献します。

例えば、餌価格の上昇傾向にある昨今、舎飼いの繁殖雌牛1頭1日の餌代が、濃厚飼料2kg×55円、購入乾草5kg×50円で合計360円かかるとします。
この牛を補助飼料なしで6か月間耕作放棄地に放牧すると、この間の飼料費を64,800円節約することができます。

兵庫県但馬地方では、但馬牛の生産に早くから放牧を取り入れて経営改善を図っています。母牛の50%を放牧したモデル事例を舎飼経営と比較すると、放牧経営は舎飼経営に対して、労働時間の約2割、生産費の1割を削減しています（図7）。また、放牧経営では、舎飼経営よりも飼養頭数を大きく増やしています（図8）。特に労働が軽減されるので、高齢者が長く牛飼いを続けることができます。

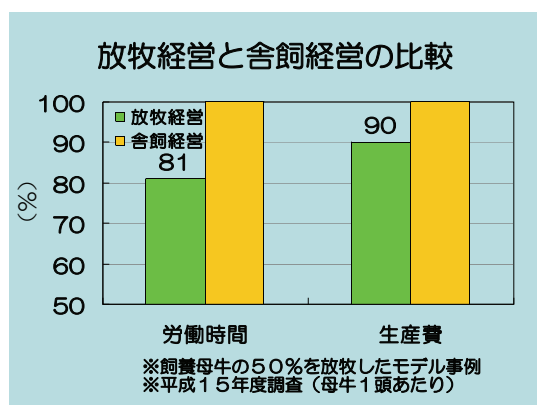


図7. 放牧による経営改善例（兵庫）

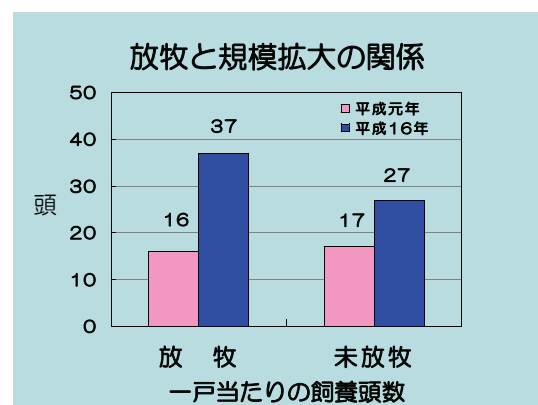


図8. 放牧による規模拡大（兵庫）

③繁殖雌牛の健康増進

放牧することによって牛が健康になり、繁殖機能が回復する効果も認められています。京都府淀高原牧場では、京都府内の農家の長期不受胎牛を預かる「リフレッシュ放牧」を行い、良好な成績が得られています（図9）。

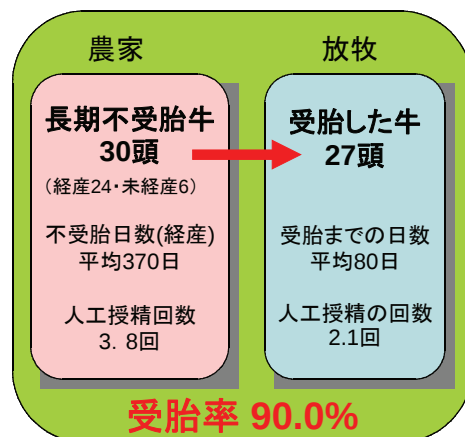


図9. 京都府淀高原牧場における繁殖機能改善の成績

5. さまざまな場所、さまざまな発想の放牧

牛は、4つの胃袋を持ち、その中に住んでいる微生物の発酵によって植物を消化することができ、一日に青草を約50kgも食べます。そして、500kgもの体重を支える4本の足の二股に分かれたつめは、斜面を登り、ぬかるみを歩くのに適しています。足の裏側には副蹄という二つのつめがあり、斜面を降りるときにブレーキの役目をします。このため牛は起伏のある地形を上手に歩き回ることができるのです（図10）。

このような優れた牛の能力によってさまざまな場所でのさまざまな発想の放牧が可能となります。

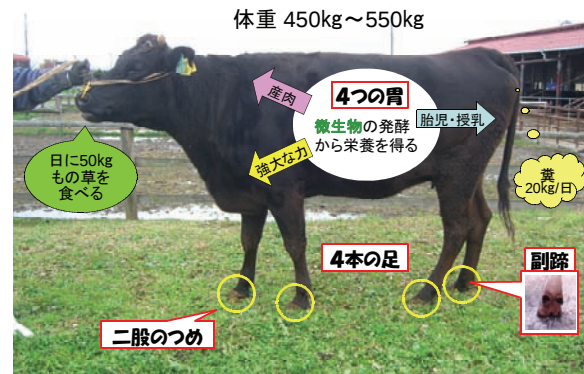


図10. 放牧で発揮される牛の身体能力



写真6. 耕作放棄田への放牧（滋賀県）

見通しを良くして獣害回避



写真7. 畦畔への放牧（京都府）

畦畔の野草を管理



写真8. 水田放牧（京都府）

幹線道路沿いの水田放牧で省力管理と畜産のイメージアップ



写真9. 近江牛ショーウインドー放牧（滋賀県）

湖周道路沿いの水田放牧でブランド牛のPR



写真10. 荒廃果樹園（奈良県）

荒廃柿園を牛の力で大掃除



写真11. 竹林（京都府）

牛が筍を食べて竹林の拡大を抑制



写真12. ため池堤体（滋賀県）

ため池堤体の草刈り



写真13. スキー場（兵庫県）

夏のグレンデの草刈り



写真14. ゴルフ場跡（兵庫県）

ゴルフ場跡地の景観維持



写真15. 里山再生プロジェクト（滋賀県）

伐採と和牛放牧による里山再生の活動